国土交通大臣賞（優秀賞）

水でつながる大きな家族の一員として

神奈川県　逗子開成中学校　一年　風間　修羽

僕は、一昨年の秋の草刈りから始まって、去年一年、南アルプスの麓にある田んぼで米作りをする機会を得ました。その田んぼは、棚田の一番上の場所にあって、川の取水口の開け閉めや、取水口に落ち葉や木が詰まったら掃除をするのも、そこの田んぼ仕事の一つでした。

田んぼから取水口までの道のりは、珍しい山野草などが生えていたり、風向きによっては獣の匂いがしたりするような森の小道でした。地元の人が、「ここは熊が出るよ。」と言っていたので、少し緊張しながら、父や兄と大きめの声で話しながら向かうのですが、この大きな森全体から水を分けてもらいにいくんだという気持ちがして、とても特別な仕事のように感じられ、僕の好きな仕事の一つでした。

川から引かれてきた水は、とても冷たいのですが、田んぼに入るとどんどんぬるくなっていきます。場所によって、水の温度も違って、その温度の違いによって稲の生育の差が見えたり、生えている草の種類が違ったり、集まっている生き物が違ったりするのも興味深かったです。

この田んぼに引かれている水がどこから来るのかが知りたくなり調べる内に、流域地図というものがあることを知りました。流域地図というのは、河川に流れ込む降水の降り集まる地域を表した地図です。その地図によると田んぼに引かれている水は、富士川水系であるということがわかりました。流域という視点で土地を見ると、山の尾根が、流域の境になっているということがわかりました。

僕が、家族と一昨年登った仙丈ケ岳の山頂に降った雨は、東側なら富士川に流れ、西側なら、天竜川に流れる。大地の凹凸が水の流れを決めていて、尾根に囲われた区域が、まるで一つの水でつながった大きな家族のように感じられました。

僕たちの田んぼを潤してくれた水は、水路を通って、隣の田んぼに流れ込みます。その水はまた、その次の田んぼに流れ込み、そうして順番に全ての田んぼが潤されていきます。

稲作というのも、水の流れで繋がった家族みんなの命の糧を生み続ける営みなんだということがわかりました。

僕が暮らしている地域は、流域の視点から見ると下流域にあります。そこには住宅やビルが立ち並び、たくさんの人が住んでいますが、田畑はそれほど多くありません。飲み水も食べ物も少し離れた地域から届けてもらうことでまかなわれています。けれども、水でつながった家族の一員であることには変わりありません。

上流に住み、今まで水源を守ってくれてきた人たちの高齢化が進んでいます。命を支える水を共有する大きな家族として、下流の人と上流の人が一緒に豊かな水を守り続ける事ができる仕組みを作っていきたいです。

暑い中での、田んぼの中や土手の草取りは大変でしたが、よかったのは、時折水の上をとても涼しい風が吹いてくること、そして何より蚊がいなかったことです。たくさん飛んでいたトンボが食べてくれたのではないかと思います。そして、秋の収穫時に、稲穂が波のように風に揺れ、その上をたくさんのトンボが飛んでいる光景を見た時、古事記で日本の国のことを「豊葦原の瑞穂の国」と呼んでいたり、本州のことをトンボの姿をイメージして「秋津島」と呼んでいたりするのは、こういう光景が全国に広がっていたからなんだなと思いました。そして純粋に美しいなと思いました。

今私たちが豊かな水を使えるのは先人たちの努力のおかげです。水でつながる大家族の一員として、先人たちの思いを引き継ぎ、未来へ豊かな環境を届けることは、今を生きる私たち一人一人の使命ではないでしょうか。